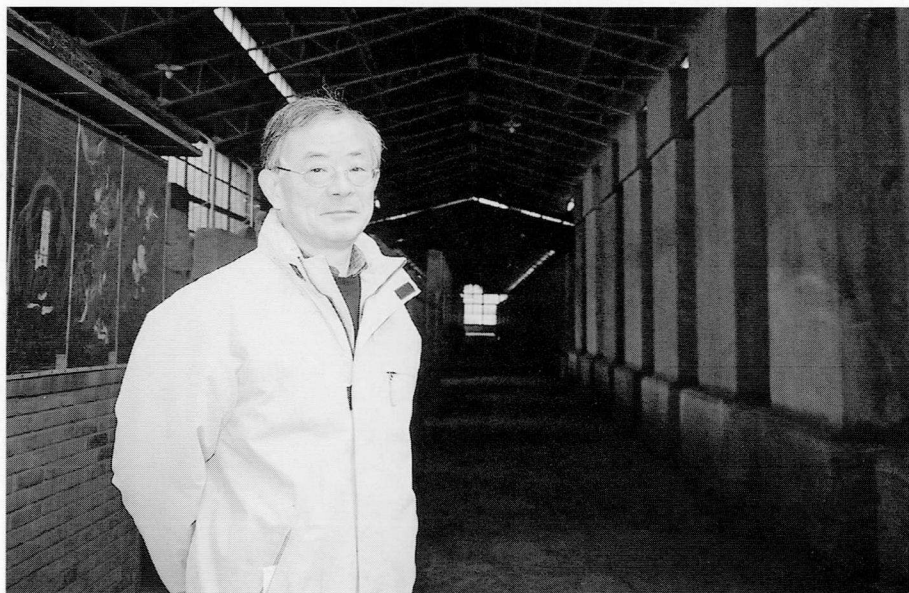


Title	後藤昭雄教授をお送りする
Author(s)	出原, 隆俊
Citation	語文, 84-85, p. 1-2
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/69052">https://hdl.handle.net/11094/69052</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University



後藤昭雄教授近影  
2005年11月 於北京国子監碑林

## 後藤昭雄教授をお送りする

出 原 隆 俊

伊井先生をお送りして二年、今度は後藤先生をお送りすることになった。伊井先生の場合、停年（大学、自衛隊の場合、一般的な定年に対して、この表記が用いられることがあるとある辞書は記す。自衛隊と同じとは初めて知った。ただし、小説などでは一般の勤め人にも使われている）遠藤周作「嘘」など）退官であったが、国立大学の法人化に伴って、教職員は国家公務員でなくなり、停年退職ということになる。

後藤先生が大阪大学に着任されたのは、伊井先生と同時の一九八三年で、前任校は静岡大学だった。かつての教養部に席を置かれ、その後、教養部の廃止に伴って文学部の所属になられた。ただ、研究室は元の位置のままであったので、共同研究室に顔をお出しになる事は、本館に住まう方たちよりは多くはなかった。また、年齢の差ということもあって、信多先生が退官された後は、研究室の運営は伊井教授が中心になられることが多かった。しかし、伊井先生の退官後は研究室の責任者になられたが、それ以前からも、時に、他の者たちが言いにくい場合にも、明確に筋論を述べられることが少なくなかった。

私が前任の大学から阪大に配置転換される前年の、国語国文学関係の教官（当時の表記）の忘年会に呼んでいただいたときに、後藤先生に初めてお会いしたはずである（事実、そうである）。ところが、それから数ヶ月、春になっての研究室の恒例のハイキングの折に、集団場所に近づく電車の中で、行楽地に行くはずなのに論文のコピーを熱心に読んでいる方を見た。いささか、

場に不釣合いな人だなど思っていたら、同じ場所に着いた。何のことはない、それが後藤先生だった。忘年会の席上で、じっくり話をする機会がなく、その後もゆっくり顔を合わせる事がなかったので、双方が相手の顔を記憶していなかったのだ。私は不謹慎なのだが、後藤先生もそんなに「他人」に関心がありでなかったかもしれない。後日、研究室の一泊旅行でのアンケートの際に、後藤先生がご自分を評して「人間嫌い」と記されたことを知って、いささか驚いたが、あるいはそういうことだったのかも知れない（ただし、別の場で任意の四字熟語を求められたときに「四面楚歌」を持ち出されたこともあるので、鵜呑みにするわけにもいくまい）。

一見（だけではないが）温厚で（だから論文の指導を受ける立場の学生は「お父さん」と、称していたとかで、そういえば息子さんが茶髪にしたときのことをお話になったこともあった。）いらっしゃるが、卒論・修論の中間発表会や研究室発表会において、言葉は非常に穏やかだが、その実質は時にかなり厳しいこともおっしゃることがあるのは、誰も認めるところであろう。ご研究の専門分野の性格上、直接的に指導する学生数は多くはなかったが、実質的には大勢の学生に影響を与えられた。また、伊井先生のように、冗談を駆使されるわけではないが、たとえば、授業課題で七五調を踏まえて「和歌史の中の漢詩文」とするような〈遊び〉を見せられることもあった。

日本漢文学の研究という分野でのご活躍は、又聞きだが、ある人が「（この分野に関しては）後藤昭雄一人が居ればいい」とかいったということを紹介するだけで十分であろう。御著書は『平安朝漢文学論考』『平安朝漢文文献の研究』を初めとして『新日本古典文学大系』などの注釈でも貴重な成果を現された。もちろん、学会活動でも重責を担ってこられた。

最後に、口幅ったいい方をすれば、教養部の時に島津忠夫先生の後任に荒木助教教授を招かれたことも（もちろん選考委員の合意の上だろうが）研究室の展開にとって、重要な判断だったと私は思う。後藤先生が伊井教授の「御退官にあたって」に書かれた言葉を〈借用〉して筆をおく。「我々は失ったものの大きさを改めて思うことになるだろう。」